御前山の木々

アラカシ・・・

カシ類としては最も普通の種であり、常緑カシの中では二次林的性格が強く、萌芽性が高く、多幹になっているものも多い。急傾斜地などの不安定な立地に生育する。

この辺ではシラカシによる生け垣が多いが、西日本などの温暖な地域ではシラカシが分布していないことが多く、アラカシが主役である。シラカシに比べて芽だしが早く、ほぼ落葉樹の芽出しと同じ時期に新芽が出て、春の到来を感じることができる。

樹皮は、黒っぽい灰色。

葉は、長楕円形で硬く、中央から先にあらい鋸歯がある。

シラカシ・・・

シラカシの葉は、長さ4～13cmの狭長楕円形で上部に鋸歯があり、葉の裏面はやや白味がかっている。４～５月に尾状の雄花序が下がり、堅果（ドングリ）はその年の秋に実る。樹皮は、灰黒色で皮目が縦に並び、細かい縦縞がある。

山地に生育している状態は直幹がすらりと伸びて、樹高は20m程度になる。和名は葉の白さではなく、材が白い事に由来する。器具材などに利用され、現在では公園樹や庭木としてよく利用されている。また、生け垣や防風林として仕立てられている。

ウラジロガシ・・・

宮城県以西に分布する常緑のカシである。カシ類は材の性質や色にちなむ物が多いが、本種の名前は葉の裏が白いことに由来する。葉はやや薄く、周辺が波打っていることが特徴の１つである。

ブナ・・・

　寒い地方では低地に、暖かい地方では高地に生え、肥沃な土壌に育つ。成長は遅く、実生から５年でも樹高は１ｍ程度である。（簡単な林齢推定では直径４０㎝で１００年と見る）

　材は、木目も通らないことや腐りやすく狂いも大きいため、建築材に使われず、役に立たないことから、漢字で木に無でブナと読ませた。しかし、現在は器具材、家具や合板などに使用されている。

　樹皮は、灰白色あるいは暗灰色で滑らかで割れ目はない。葉の特徴は、側脈の終端が鋸歯の凹部に入るところである。

スギ・・・

　常緑の高木で、自然分布としては、本州・四国・九州の冷温帯下部から暖温帯上部に分布していたものと思われるが、植林などによる人為によって分布は暖温帯全体にまで広がっている。樹高は40mにも成長し、屋久島に生育する縄文スギは推定樹齢7200年とされ、これが事実であれば世界一長寿の樹木である。

　スギはヒノキとともに日本の植林の主要樹種である。ヒノキにくらべて水分を好むので、谷沿いなどの適潤地からやや過湿な立地に植栽される。冬の終わり頃に一斉に開花して大量の花粉を飛散させ、花粉アレルギーの原因として問題となっており、今では、小花粉のスギの苗が生産され、植林されている。

ヒノキ・・・

　常緑の高木であり、スギと同様に植林の主要樹種。本州から九州の山地に生育し、尾根や崖地などの痩せ地に生育する。樹高は20～30mになるが、大きいものでは高さ50mにもなる。材は美しく耐久性が高い、高級建築材である。ヒノキは桧の字を当てられているが、元来は「火の木」であり、こすり合わせて火をおこしたことに由来するという。

　スギやヒノキなどの植林は建築用材などの森林資源として必要なものである。

　ヒノキは、サワラとよく似ていることから見分けにくいが、葉の裏面を見てみるとヒノキはY、サワラはHの字が見られる。

アカマツ・・・

北海道南部から屋久島まで広く分布し、二次林に広くみられる樹種である。痩せ地にも耐えて生育し、乾燥した尾根から湿地にも生育する。名前の由来は樹皮が赤いことに由来する。アカマツは春に花を咲かせ、風によって花粉を散布する。花粉の量は多いが花粉症が起こることは少ないので問題にならない。

マツノザイセンチュウ（マツ枯れ病）によって急激に個体数を減少させつつある植物である。

樹皮は、名前の通り赤みを帯び、根元の樹皮は網目状に良く裂ける。葉は、短枝状に二枚づつ付き針状である。

材は、松脂を多く含み、火付きが良く火力も強いため薪炭材として使用さる。また、建築材としても利用されている。

ホオノキ・・・

北海道から九州に分布する落葉高木。主に谷筋や、二次林の中にも生育する。
ホオノキの特徴は、長さ25～30cmほどもある、大きな葉である。太い枝の先端付近に集まって大きな葉を広げる様は遠くから見てもすぐにホオノキであることがわかる。５月頃から枝先にクリーム色の大きな花を付ける。高い梢に花を付けるので、かなり高いところからではないと見つけにくい。条件が良ければ樹高３０ｍになる。

材は柔らかく、刃を痛めないのでまな板や刀の鞘に利用され、版木にも使用されたりする。また、葉は、朴葉味噌、朴葉餅、朴葉寿司、おにぎりを包むなど、表面が無毛なので昔から使われていた。

モミ・・・

　常緑の針葉樹。成長は早く、大木になる。神社の境内などに生育していることが多いが、近年はマツ枯れの後に侵入し二次林にも稚樹が生育しているのが認められるようになった。アカマツと同様に、発芽・定着には腐植質が地表を覆っていないことが必要であり、斜面崩壊や表面侵食などによって鉱物質土壌が表面に裸出しやすい立地に生育する。

　樹皮は、壮齢で灰色、老木で暗灰色、鱗片状に割れて剝げる。葉は、密生し枝にらせん状につき、葉先は２つになっている。

　材木としては良材ではないが、白くて年輪の目がきれいなので、棺や塔婆として利用されている。

カヤ・・・

　宮城県以南から屋久島までの各地に分布する常緑の高木。カヤ材で最も知られている用途は、碁盤や将棋盤であり、最高級品とされる。

　枝は対生し、側枝は三叉状に伸びる。樹皮は、灰褐色から褐色で縦にさける。葉は表面に光沢があって堅く、モミに似ているが葉先は分かれていなく、鋭くとがっている。

　和名は古名のカヘがなまったものと言われている。本来は岩場などに点々と生育しており、群落を形成することは稀である。

ヤブツバキ・・・

東北以西の暖地に生育する常緑の小高木である。照葉樹林（シイ・カシ帯である）の代表的な種である。

ツバキは冬に咲く花として、古来からサザンカとともに品種改良されてきた。ツバキの種子は油を大量に含んでおり、ツバキ油を採取することができる。ツバキ油は薬・化粧品などに利用され、重要な油用植物である。

葉は、無毛で表面は濃い緑色・長さは４～８㎝で縁にはまばらな低い鋸歯がある。

ヤマザクラ・・・

本州・四国・九州に分布する落葉高木。幹の直径は１ｍを越えるまで生長し、サクラの仲間では巨樹となり、長寿な種である。春、葉が展葉すると同時に開花し、葉桜となる。花の艶やかなソメイヨシノに比べ風雅のあるサクラであり、好む人も多い。若葉は赤味を帯び、樹皮も紫褐色でサクラらしい。

日照条件のよい場所に生育する。土壌の浅い岩礫地や尾根筋に生育していることがあるが、日照条件と関連しているものと思われる。ヤマザクラは寿命の長い樹木であり、各地に老木・巨木が残っている。県内の名所や公園にあるサクラはほとんどがソメイヨシノであり、里山や人工林の中に咲くヤマザクラは美しいものであり、春の訪れをいち早く感じるものである。また秋田県の有名な樺細工はヤマザクラの樹皮を使用している。

樹皮は、紫褐色で皮目は横に長い。

葉は単葉で互生し、倒卵形あるいは長楕円形で鋭い鋸歯があり、先は鋭くとがっている。

サカキ・・・

神事に使われる常緑の中高木。漢字で書くと「榊」であり、まさに神様に捧げる木である。関東地方以西の温暖な地に生育する。神社では意図的に残し、神事には玉串として使用される。しかし、一般的に神棚などに飾られるのは、「サカキ」がほとんどである。

太さは、直径３０㎝にもなり、樹皮は灰淡褐色で若枝は緑である。葉は、２列の互生で厚みのあるのっぺりとした表面で、鋸歯はまったくない。

ヒサカキ・・・

照葉樹林帯の二次林から極相林まで広く生育する低木から亜高木で、生育範囲がたいへん広い。照葉樹林域ならば、どこにでも、どんな森林にも生育し、乾燥にも強く低木状態でも日差しがあれば生育する。早春の花の少ない頃に花を開いて虫によって効率的な花粉媒介を行い、冬の果実の少ない頃に鳥により散布される。

県内にはヒサカキを採取して首都圏に神事用として販売している業者も多い。特に常陸太田市産は品質が良いとされている。

樹皮は、灰褐色で平滑だが不規則な細かい縦じわがある。葉は、２列互生で長楕円形、縁には鈍鋸歯がある。

ケヤキ・・・

　高さ30mを越えることもある落葉性の高木。本州以南の日本各地に分布する。渓谷沿いや水分条件の良いところによく見られる。枝はほうき状に広がって美しく、都市公園や街路樹などにも広く植栽されている。特に関東平野では街路樹や公園木として広く植栽されている。

　種子は枝から離れて落下するものと枝に付いたまま枝ごと風に運ばれて散布されるものがあり、枝に付いたままのものの方が、より遠方に散布されるという。材は木目が美しく、狂いも少ないので家具材・楽器・器具・建築材などに広く利用されてきた。茨城県の県西・県南の屋敷林にケヤキが植栽されているところが多い。また、各地にケヤキの老木や名木も多くみられる。

クリ・・・

　クリは北海道から本州・四国九州に分布する落葉の高木。冷温帯下部から暖温帯にかけて広く生育する。里山に生育しているものは高木といえるほどのものは少ないが、時として巨樹に生長したものもある。二次林に普通に生育する。

　クリの堅果は、古代から重要な食物であったと言われている。

　材は赤褐色であり、タンニンを含んでいる。湿った状態でも腐りにくいことから、水車小屋の水がかかる場所や家屋の土台などの腐りやすい場所に使用されてきた。茨城県では古い農家などに見られる土台はクリである。ちなみに笠間市はクリの生産量が日本一です。

アオダモ・・・

　北海道から九州までの山地に広く分布している。樹高は10-15m、太さは50cm程になるが成長は遅い。花は春に咲く。円錐花序に白い5-6mmの小花を多数つける。名の由来は樹皮が緑青色、枝を水に浸けておくと水が青い蛍光色になること、青い染料に利用されたことによると言われている。

　材質は堅く強いが粘りがある。そのため曲げることができ、このような特質を生かしてさまざまな用途に使われ、もっとも知られているのは野球のバットである。他にはスキー板、テニスのラケット、家具材、建築材で、さらに染料としても利用されている。茨城県では天秤棒に使用された。最近では、街路樹や公園木として植樹されることも多い。

　貴重なアオダモの人工林が茨城県常陸大宮市（旧美和村）の国有林にあります（鷲ノ子神社手前）。

コナラ・・・

　北海道から九州に分布する落葉性の高木で、名前は「小さい葉の楢（なら）」の意味。伐採されても切り株から「ひこばえ」（萌芽）を形成して再生する。このような萌芽再生能力が高いために薪炭林（炭焼きのヤマ）の主要樹種となっており、二次林を構成する代表的な樹種である。

　ドングリから芽生えた稚樹は太い根を発達させる。地上部は爪楊枝ほどの太さだが、地下部は割り箸サイズであり、直根をよく発達させるので、土砂崩れなどの防止には大きく貢献しているといわれている。茨城の里山にも普通に見られる。

　樹皮は、灰黒色で縦に不規則な裂け目がある。葉は、互生で倒卵形、縁には尖った鋸歯がある。

ウラジロノキ・・・

本州から九州に生育する落葉の高木。同属のアズキナシとよく似ている。葉の裏が白く、まさに「ウラジロ」で見たままの名前である。葉の白色の毛は、水分の蒸発を防いでいるとともに、太陽の光を毛で反射しているわけである。水分のすくない状態で、強い日照があたることは致命的なダメージになりかねない。高木となる木本植物でありながら、このような光に対して臨機応変に対応する植物は珍しく、このような能力をもっているために、尾根や山頂などの乾燥する場所における生育が可能となっている。

材は、器具・薪材などに利用される。秋には赤い実をつけるが鳥には好まれずに冬まで残っている。

葉の表

葉の裏

ハルニレ・・・

北海道から九州に分布する落葉高木。北海道では街路樹に植栽されるなど、普通に生育する樹木である。河川沿いなどの肥沃な立地に生育し、大きく育って直径1mにも成長する。

樹皮は縦に細かく裂け、全体的に白っぽく見える。葉は、互生し、広倒卵形・表面はざらつき微毛があり、縁には二重鋸歯がある。

街路樹や公園樹に利用されている。材は堅くて重く、器具･楽器材･薪炭材などに利用される。また、枝の繊維からは縄を作る。

イヌシデ・・・

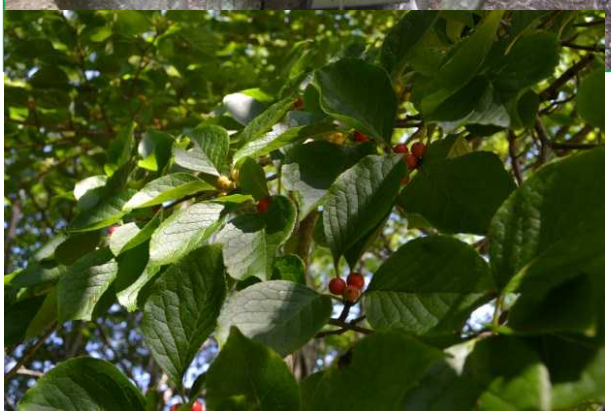
本州岩手県以南から九州に分布する落葉高木。多くは二次林に生育し、山道の側などに多い。

樹皮は、灰褐色で若木は平滑であるが、やがて縦に割れ目が入る。葉は、長さ４～８㎝で側脈が著しく、１２～１５対ある。若枝や葉には毛が多く、葉には産毛がある。葉の表面の毛は、脱落しやすいが、秋まで残る。

アオハダ・・・

北海道から九州に分布する落葉高木。主に明るい落葉広葉樹林中に生育する。花は6月頃短枝の先端に葉腋から1～2つき、果実は秋に赤く熟し、7mm程度。山道を歩いていて枝の先に赤い実が集まって付き見事である。

樹皮は薄く、硬い物でこするとはがれて緑色の皮層がでる。大きく生長した樹木でありながら、このように樹皮が薄く、葉緑素を含んだ皮層がある植物は少なく、これがアオハダの名前の由来と言われている。



ネジキ・・・

　高さ６m程度に生長する落葉の小高木。本州から九州の各地に分布する。アカマツ二次林に多く見られたが、近年マツ枯れにより次第に減少しつつある。

　和名の由来は樹皮がねじれている意味であると図鑑には記されているが、材にもねじれがあり、細工物には使えないと言われているが、広島の宮島では、短く切ってしゃもじを作るのに利用している。

　５月から６月にかけて白い花を下向きに咲かせる。秋には黄色から赤色に紅葉すると普段はなかなか目立た
ない木であるがあでやかである。

　葉は互生し、卵状楕円形で両面にぬた毛がある。（葉は、有毒である。）

リョウブ・・・

　北海道南部から九州に分布する落葉の高木。リョウブ属の植物は、世界では64種ほど知られているが、日本では1科1属1種の親戚縁者のいない,さびしい植物である。明るい二次林の谷筋などに多い。初夏に房状の花序をつける。蜜をたくさん出すようで,吸蜜に訪れる昆虫は多い。

　樹皮が薄くはがれて幹は滑らかであり,「さるすべり」とよぶ地方もある。葉は、互生して枝の先に集まり、倒卵形で先は尖り縁はするどい鋸歯がある。

　リョウブは伐採にもよく耐えて萌芽する。山道では何度も刈り取られて低木状になっているものも多い。

ヤマボウシ・・・

本州から九州に分布する落葉の亜高木。適潤地で良く生育し、乾燥する場所ではあまり生育が良くない。近年庭園などに植栽されることが多くなった。初夏に特徴のある花を咲かせて目立つ。

和名は山法師であり、白い総苞が白いずきんをかぶった山法師を連想することから付けられた。秋には赤いイチゴを連想させるような果実ができ、甘くて食べることができる。

樹皮は、赤褐色でうろこ状に剝がれる。葉は、対生し卵状楕円形で先が急に鋭く尖り、縁が全体的に波打っている。表裏ともけが散生するが、裏面の脈脇に黒褐色の毛が集まる。

コクサギ・・・

「小さな臭い木」であり、その名の通り、独特の臭気がある。渓谷などに生育する落葉低木で、花の時期、谷沿いの道など歩くと臭いでわかる。葉を煎じた汁は殺虫効果があり、民間薬としても使われている。特にペットの駆虫薬として使われる。

幹は、灰褐色で縦の模様と横長の皮目が目立つ。

葉序が独特で互生だが２対づつ左右につく。

アブラチャン・・・

本州から九州に分布する。高いもので高さは6メートルに達する。春・3～4月に淡黄色の花をつける。山地の半日陰の湿地 に多く生育する。

花は葉に先立って咲き、早春、葉がほとんど芽吹いていない森の中では、黄色の花が目立つ木の一つである。

アブラチャンの「アブラ」は「油」で、木全体に油が多いことが名前の由来。枝や実にはクスノキ科特有の芳香がある。
材は油分が多いため、薪炭として使われた。また、過去には果実や枝から油をとって、灯明用や髪の鬢付け油（びんつけ）用に利用したが、食用にはならなかった。

樹皮は、灰褐色で滑らか。

葉は互生し、卵型または楕円で先は急に鋭く尖っている。

葉柄は、赤みを帯びている。

イイギリ・・・

本州から九州の山地に生育する落葉高木。関東地方の緑地や公園などに比較的よく生育している。葉の形や生育場所はアカメガシワに似ているが、類縁関係はかなり遠い。

花は５月に咲き、秋には直径8～10mmの赤い液果を稔らせる。名前は飯桐、その名の通り、昔、この葉で飯（メシ）をくるんだことからそう言われている ）。また、 。果実がナンテンに似ているのでナンテンギリ（南天桐）とも言われている。

樹皮は、白っぽくて平滑で点状や横長の皮目が並ぶ。1カ所から枝を車輪状に出す。葉は、互生して５～７㎝のハート型で５～７本の掌状脈がある。
葉柄は、赤みを帯び長い。
材は器具材、下駄材として利用されている。

シラキ・・・

本州から南西諸島まで中国に分布する小高木。樹高は10m以内で樹皮は灰白色でなめらかであり、和名の由来となっている（材が白いからとの意見もある）斜面の下部や谷筋などに生育している。

初秋のころの赤・黄・紫を交えたような紅葉はあざやかで見事であり、色をサーモンピンクと表現する人もいる。

シラキの葉は、変異に飛んでおり、時として大きさや質感、付き方がイタドリに似ているものがある。樹皮は灰白色で滑らかである。枝を折ると、白色の乳液が出てくるのが特色である。

材は細工物や薪炭材として利用されている。

サイカチ・・・

日本の固有種で本州から九州に分布する。山野や川原に自生する。また、実などを利用するために栽培されることも多い。幹はまっすぐに延び、樹高は15mほどになる。

名前の由来は、古名の西海子（さいかいし）からきたものである。

幹には、鋭い刺が多数あるが、老木にはない。葉は互生・偶数葉状複葉で長さ２０～３０㎝、長さ２㎝ほどの長楕円形の小葉を６～１２対もつ。

花は5、6月の初夏に咲く。長さ10-20cmほどの総状花序で黄緑色で楕円形をしている。秋には長さ20-30cmで曲がりくねった灰色の豆果をつけ、10月に熟す。鞘の中には数個の種子ができる。種子の大きさは1cmほど。

木材は建築、家具、器具、薪炭用として用いる。豆果は生薬で去痰薬（痰を取る）、利尿薬として用いる。

また、古くから洗剤として使われている。豆はおはじきなど子供の玩具としても利用される。若芽、若葉を食用とすることもある。

タカノツメ・・・

　北海道から九州の林内に成育する落葉の小高木。
タカノツメは冬芽の形が鷹の爪に似ていることから言う。別名のイモノキは、枝がもろいことによる。秋に黄色に紅葉する。黄色に紅葉する樹木の中では、最も鮮やかな部類であると思う。
花は５月頃に開き、果実は秋に黒紫色に熟す。
　根が貧弱なので雪国では、斜面下部側に倒れやすく、毎年倒れては起き上がることを繰り返している。年輪が明瞭ではないので、「経木」に使われる。春にはコシアブラ、タラノ芽などと同様に私たちの食卓をかざる。
　樹皮は灰色で滑らか。葉は三出複葉であるが単葉・２葉も混じり、枝の先端に束生・集中する。長さ５～１５㎝の楕円形で、毛状の微細な鋸歯・先端が急に鋭く尖る。

ミズキ・・・

　北海道から九州までの日本各地に分布する落葉高木。ミズキの名前は、樹液が多く、早春に切ると水が滴り落ちるからであるという。そのような性質であることからもわかるように、渓谷周辺などの水分条件の良い場所や渓谷斜面などに生育する。
　樹皮は、灰褐色で縦に浅く裂け目ができる。葉は、楕円形で短枝状の枝に集まって互生する。縁は、大きく波打ち・刃先が急に尖り、裏面はやや白く、有毛。
　花は５月から６月のはじめにかけて枝一面に咲き、遠くからも白く目立ちなかなかのものである。
　材は白色で加工が容易のため、東北地方ではこけしの材料、盆、杓子、椀、箸、玩具、下駄、器具材などの用いられる。

サンショウ・・・

本州から九州に分布する落葉低木。イヌザンショウと同様に伐採跡などに生育する低木である。イヌザンショウよりも大きくなる。若葉を香味料に利用するので、人工植栽される。棘は対生であり、イヌザンショウと明瞭に区別できる。

　サンショウの葉をお吸い物などに入れるときに軽く叩くのは、ミカン科特有の油点を破壊し香りを出すためである。これがいい香りである。古くは、縄文時代から香辛料や薬用にも使われていたと言われている。

ヤマウルシ・・・

日本全国に分布する落葉の小高木。種子の寿命が長く、地中に埋もれて伐採などの攪乱を待って生育する。二次林にも多く生育する。樹形はあまり枝分かれせず、幹や枝の先端にまとまって葉を広げる。このような樹形は伐採跡などでいち早く光を獲得するためにある程度の樹高を確保し生育する。ヤマウルシの和名は、山に生育する漆の取れる木であるとの意味で、樹液から漆液を取ることができる。漆液の採取は、樹皮を傷つけると最初は白色の乳液が出るが、やがて黒紫色に変化する。春の新芽が出るころはかぶれ易いが、秋の紅葉のころはあまりかぶれないと言われている。しかし樹液に直接触れるとかぶれる。茨城県では大子地域で今でも漆液の採取を行っている。

シキミ・・・

　仏事に使われる常緑の小高木であり、お墓に「花の木」として供えられる。宮城県以西から九州に分布する。

　春に淡黄色の花を咲かせる。秋に割れて中から有毒の種子が出てきてこれが「悪しき実」と呼ばれてシキミになったという意見もある。

　ちなみにシキミの果実を誤って食べた場合の中毒症状は、嘔吐、腹痛、下痢、痙攣、意識障害等で、最悪は死亡と言われている。

ナツハゼ・・・

北海道から九州に分布する落葉の低木。丘陵地で明るい二次林に生育する。主にアカマツ二次林に生育し、尾根などに多い。葉には荒い毛があり、触るとざらつくので区別がつきやすい。

　秋には果実が黒色に熟し、食べられる。良く熟れたものは甘いが酸味は強くいわゆるブルーベリーの一種である。山歩きで乾いたのどを潤してくれる果実でもある。

　和名は夏ころからハゼのように紅葉するとの意味である。

ナツハゼの葉は、秋に赤く紅葉する。春の芽だし時にも赤く、そして盛夏にも赤い葉を付けることがあり、落葉期を除いていつも赤い葉の個体が存在することになる。

　葉の色は日照条件とも深い関係がある。果実の色から、ヤマナスビと呼ぶ地方もある。

コアジサイ・・・

関東以西の本州から九州に分布する落葉低木。
　あまり高くならず、せいぜい1-2mほど。枝は比較的良く分岐し、あまり強くない。新しい枝は毛があるが、花が終わる頃までに落ちてしまう。花は6-7月、小さな散房状花序でかわいらしい印象の花を咲かせる。
　名前は、小型のアジサイであるため「小紫陽花」と呼ばれる。梅雨時の落葉林に点々と咲いているのは可憐で印象的である。

ウリカエデ・・・

宮城県以南の本州から九州に分布する落葉小高木。丘陵地帯の明るい二次林に生育する。樹皮は緑色で、和名は樹皮をウリの肌に似ているのでついたと言われている。同様にウリハダカエデというのもあるが、こちらは、樹皮が緑色（若木のころ）で、マクワウリに樹肌が似ているのでその名がついている。混乱しないように。
また見分け方は、葉の小さいものがウリカエデ、葉の大きいものがウリハダカエデである。

ウワミズザクラ・・・

石狩平野以南から九州に分布する落葉高木。日当たりがよく、やや土壌水分が多い場所によく見られる。

樹皮は横に長い皮目が目立つ。老木になると樹皮はうろこ状に剥がれる。花は４月から５月にかけ、新しい枝の先に総状の花序を出す。サクラ類は葉がよく似ており、区別しにくいのでよく図鑑を見て判断するとよい。

サクラ類は秋には紅葉がきれいだが、ウワミズザクラはそれほどでもない。

材は粘りが強く、道具の柄や器具材とし、樹皮や根を染料に用いる。また、新潟県地方ではつぼみの花穂や緑色の果実を塩漬けにして食べる。

アワブキ・・・

本州から九州に分布する落葉高木。高さは１０m程までで、あまり高くならない。水分の多い谷筋などに生育することが多く、材も水分を多く含んでおり、この木を燃やすと切り口から泡が出るので、「泡吹き」という名前となっている。

また、６～７月に円錐花序を形成し、白黄色の花を咲かせる。この時期に遠くから見ると白い花が泡を吹いたように樹冠を覆うので・・・と言う説もある。

葉は長さ８～25cmくらいあり、比較的大きな葉である。葉脈ははっきりしているのが特徴である。クリの葉によく似ている。秋の紅葉時には褐色に近い黄色になり目立たないがなかなか味わいのある色に紅葉する。

材は、水分が多く狂いが生じやすく割れやすいので目だった利用方はない。薬にも食にもならない。

ヒイラギ・・・

福島県以西の九州に分布する常緑の低木である。和名は柊（ヒイラギ）であり、葉の棘（トゲ）がささるとズキズキするほど痛いという意味の古語である「（疼（ひいら）ぐ」に由来するという。11月ころに白い花をつけ、果実は翌年の初夏に黒く熟する。低地の森林に生育し、やや乾燥した場所に多い。

　葉には鋸歯の先端が変形した棘があり、触ると痛いので侵入防止を目的とした生垣に使われる。茨城県では生垣としての例は少ない。老木になると葉の棘は次第に少なくなり、最後は無くなって全縁となってしまう。これは　幼木の時期は樹高が低く、草食動物などに食べられてしまう危険性が高く、棘で武装するが、成長して樹高が高くなると棘を持つ必要がなくなるからである。

材は堅く、なおかつしなやかなので、衝撃などに強いために玄翁（げんのう）と呼ばれる大金槌の柄にも使用されている。特に熟練した石工に愛用され、笠間の石工さんの自宅の庭先に植えられていたと言われている。他にも、細工物、器具、印材などに利用される。

一般的なのは、節分にイワシの頭をヒイラギの枝に刺して玄関に飾って魔 除けとする風習は現在でも行われている。